

# 『伊豆大島文学・紀行集』(詩歌・小説・紀行記・絵画編の四巻組) 編集にあたり

藤井 虎雄

私は昭和初期に島娘(あんこ)姿を彫刻作品に表し、島人に「あんこ人形彫刻(農民美術人形)」を指導した若き彫刻家木村五郎に興味を持ち二十数年調査をしてきました。国会図書館などに出向き彫刻家の資料を探して見ると、大正期から戦前くらいまでの美術雑誌には「多くの画家たちが描いた大島作品」や「大島紀行・見聞記」などが多数掲載されていることを知り、画家たちのデータも集めてきました。

今回の文学・紀行集の編集委員の一人である時得孝良氏(郷土研究家・現在療養中)は六十数年前の学生時代に恩師から宮沢賢治の長編詩「三原三部」や歌人土田耕平が大島で詠んだ歌集「青杉」の存在を教えられ、その出会いを機に大島を訪れた文人・画家たちの資料を掘り起こし、「伊豆大島文学・紀行散策」としてまとめることをライフワークとされてきました。作品収集ではよく日本近代文学館に通い、多くの図書・雑誌資料を利用されたとのこと。

近年相次いで永眠された大島の郷土史研究家たちの蔵書を見る機会がありました。どの方の書架にも大島を扱った同タイトルの書籍(柳田国男編『伊豆大島方言集』・山口貞夫著『伊豆大島図説』や大島出身の坂口一雄著『伊豆諸島民俗考』など)が並んでいました。島の貴重な財産だと思われて

研究されてきたに違いありません。また、昭和初期の地元の「島の新聞」も大島を紹介する文献や文芸を精力的に載せていました。

「島の先人達から忘れ去られることなく現代まで受け継がれてきた文人墨客の資料と新しい発見をひとつにまとめ、出版したいので手伝って欲しい」と大島町から頼まれて編集に係わってきました。

『伊豆大島文学・紀行集』は、二年の再調査と準備期間を経て、平成二八年度から毎年刊行、『第一巻 詩歌編』(北原白秋・北川冬彦・西條八十など一四一名)、『第二巻 小説編』(藤森成吉・三島由紀夫・林美美子など二七名)、『第三巻 紀行記編』(幸田露伴・井上円了・与謝野晶子・宮本常一など二〇〇名)、『第四巻 絵画編』(和田三造・伊東深水・中村彝・棟方志功など一六六名)の四巻シリーズで出版が完了しました。文人や画家たち総勢四二四人の作品が収録され、四巻の総ページ数は二七三三ページに達しました。このように多くの貴重な資料が大島町の文化事業として一つにまとめられたことは嬉しいことで、島の宝です。

私が、作品調査・編集・出版にエネルギーを費やすことができたのは、なぜ文人墨客たちは海を渡って大島にやってきたのか、そして何を描いたのか、当時の大島がどのような島だったのか、多くの芸術家書き残した足跡から、それらを解き明かしたいという強い欲求があったからです。それを知るヒントがあれば「島の魅力やこれから進むべき道が見えてくるのでは」と注目してきました。

もうひとつは、これだけの芸術家の大島の資料があること、それを大島に住む方や大島ゆかりの方々に「これほど豊かで魅力的な島であることを知ってもらいたい」その一心で収録に努めまし

た。編集者としては持てる力以上を出し切つてやり遂げることができたと思っています。

大島町は出版を記念したトークイベント「火の島に何を語るや」をこれまでに二回テーマ別に開催しました。編者の時得氏と二人で作品の解説や収録の手法などスライドを使って話しました。別室において古いビデオ映像の上映やテーマに沿った紙資料の展示をして見ていただきました。

私はシリーズ最後の絵画編校正をしている時に、「四巻組に収録される文人墨客のほとんど島外からやってきた人たちが書き記したもののなかで、来島された時代の大島の事情や積み残した課題やらを未熟ながらも本編に文字にして書き残したい」と思い、『画家と画家を迎えた大島の足跡』という一文を書いて載せてもらいました。

「何で芸術家は島にやってきたのだろうか」今もずっと考えています。大正時代から戦前にかけて小笠原よりもっと南にある「南洋群島」に五〇人ほどの日本の画家が訪れて描いた作品の展覧会図録を見ると、その中の一〇人ほどが大島にも足跡がありました。

南洋群島に画家を向かわせたものは、南方へのあこがれ、原始的なものへの好み、特有の風俗や自然、民族学と考古学への関心、ゴーギャンの影響などが図録から読み取れます。深く探るにはもつと多くの時間が必要でしょうが、画家たちが好んで題材とした「大島の島娘(あんこ)の水汲み姿」を思い浮かべると興味深い話です。

絵画編発刊後、大島作品を所蔵する美術館から「大島作品展を企画してみたい」という嬉しい知らせが届いています。期待しながら資料調査と分析を続けてゆこうと思えます。

(伊豆大島木村五郎・農民美術資料館(藤井工房)代表)